

幼児期の記憶について

田中 賢

一、幼児期の経験といろいろな記憶との関係

青年や成人に、その三才前の幼児期の経験を思い出し、それを記述するように求めると、はつきりと答え得る。すなわち再生できる経験がないか、或いはあつても甚だ少ないとが知られる。もちろん、経験は再生され得なくなつていても、もとの事象に出会うとそれと気づくこと、すなわち再認できることによって、原経験が保持されていることがある。また再生や再認ができるなくなつていても、前の経験を再び行なわせてみると、前回よりも能率的に行動し、そこに前経験の何かが残つていて、一定の基準に達するのに、前よりも少ない時間や努力で間に合い、節約されるものがあることもある。この場合にも、経験の記憶があつたといわれる。

しかし幼児期の学習が甚だ豊富であるのに比較して見ると、如何

に記憶に種々の様式があるとはいゝ、回想され得る記憶が甚だ少ないことは、全く驚くべき現象である。幼児は三才までに既に多くの人生経験を積んでおり、人間らしい言動ができるものになつている。すなわち、数百のことばを使い、さらにその数倍のことばを理解し得るようになっており、多くの身体的運動的技能を獲得しており、恐怖や怒り、友愛的態度や敵対的態度、信頼や嫌惡などの表現においても過去の経験の保持があり、その影響が強く表わされていることが知られる。

しかるに成長の後においては、この期の生活の全部、或いはほとんどの全部が忘却されていて、その生活の様相を当事者の内側から明らかにすることが困難になつていて。しかしすべてが忘却されていわけではない。また、幼児が獲得した知識や習慣、態度、傾向など

は、彼がその起原を回想し得ようがなかろうが、その後の彼の行動に影響する。ここに、僅かに残る幼児期記憶を手がかりに、その生活を蔽いかくすカーテンの背後を探ね見ようとする努力が、人々によって試みられるわけである。精神分析学徒のなす企ては、その科学性において不信が持たれることがあつても、この点において、非常に重要な問題の解明に迫つてゐるものである。

二、人生最初の記憶

(1)かかる幼児性忘却 (Infantile Amnesia) は、フロイドによつて初めて重視すべき現象としてとりあげられた。彼は、幼児期、普通六才或いは八才までの時期を蔽いかくすと主張するこの特殊の記憶喪失を精神分析学的に調べ、そこに幼児性欲論と結合するものと認め、抑圧の機構を以て、それを説明しようとした。また、成人に回想される僅かに残る幼児期の記憶は、重要な真実が転置などにより隠蔽された記憶であり、その背後の無意識の真実を差し支えないよう、或いは無害なように変装され匿まわれた記憶 (Screen memories) である。したがつて、幼児期においては些細な無意味なことが記憶されているように見えるが、実はそうではなく、それは重要な経験の変装であるといふのである。これらは、患者の臨床的研究から導き出された事実、または理論であるわけであるが、それを一般化し、幼児期の記憶をすべてこの見地で解釈することには

問題がある。

第1表 幼児期経験の回想

年令	年間平均回想数	
	男	女
1以下	0	0.01
1—2	0.06	0.16
2—3	0.50	0.83
3—4	1.83	3.47
4—5	6.63	6.92
5—6	11.60	11.16
6—7	14.35	13.83
7—8	16.17	16.67
合計	51.14	53.05
SD	20.75	22.46
範囲	10—114	12—137

(2)多数の正常な青年や成人について、その幼児期の経験の記憶を研究したものもいろいろある。その中の代表的なものの一つであるウォールドフォーゲル (Waldfogel, A.) の研究によると、大学生について、八才までの経験で回想できるものは第一表の如くである。

また、スミス (Smith, M. E.) の一老婦人心理学者についての研究によれば、人生の諸時期における平均記憶数は、第二表の如くである。

これらの表を見ると、個人差が著しく大きいが、全体の傾向としては、三・四才までの記憶数は著しく少ないが、それより順次増加し、殊に一〇才頃著しく増加し、その後は増加が少ないが二

第2表 人生諸期における記憶数

年令区分	2.11 4.3 4.3	4.3 6.9 9.11	6.9 12.8 15.2	6.9 15.2 20.2	12.8 20.2 25.6	15.2 25.6 29.6	20.2 29.6 31.6	25.6 31.6 33.11	29.6 31.6 33.11	31.6 33.11 39.11	
記憶数(月平均)	1.25	5.8	9.8	10.4	10.7	11.7	11.8	11.0	8.4	10.9	10.8

○才頃最高に達しており、その後も余り変化のないことが知られる。これらによれば、記憶数の増加は、一般の精神発達、ことに言語の発達と密接な関係があることが推定せられる。そして幼児期に特殊の抑圧機構による忘却現象があるということは、これらの数的变化の傾向からは見出されない。また、筆者の研究によれば、恥ずかしいが、とか、"思い出したくないが思い出される"として、盗み食いした経験や、異性器を凝視して揶揄された経験などが最初の記憶として回想されており、また回想内容が広く幼児生活の全般にわたっていることなどからも、隠蔽記憶の構想は問題だと思考される。

(3) 健常な多数の青壯年について、その最も古い一つの回想について研究したもの

のものいろいろある。

筆者が調査した結果を示すと、第三表の如くである。

第3表 最初の記憶の年令分布

年令	男	女
1 以下	0	1
1.0—1.9	1	2
2.0—2.9	7	14
3.0—3.9	15	30
4.0—4.9	34	23
5.0—5.9	26	19
6.0—6.9	14	8
7.0—7.9	3	3
8.0—8.9	0.5	0
M	4.44年	3.83年
S D	1.245	1.364

(4) 最初の記憶と報告されるものの内容を見ると、かなり多種多様であって、身近な事象に関与する幼児生活の全般にわたっている。

また、報告された事件に登場する人物を見ると、母親、父親が断然多く、兄弟姉妹、友だちと順次減っていく。事件の季節に関しては、明確でないものが少なくないが、春夏のものが多く、秋冬のものが少ない。ことにこの傾向は男子に著しい。これらの事柄は何れも幼児生活から当然予想されることであつて、回想された経験が現実の幼児生活をよく反映しているとの一証拠であると見られる。

つぎに、これらの記憶経験に伴なう感情調を見ると、感情的色彩を伴なわない中性調のものは甚だ少なく、快・不快の感情的色彩を伴なうものが圧倒的に多い。このことは、重要な自我関与の経験が、記

憶をもとりあげて答えた結果であるとも考えられるが、結果は、必ずしもそうではない。そのことは、両者の回想の年令分布を見ると、平均年令においては若干の差は認められるが、ほとんど同じ広範囲の分布を示していることから知られる。(b) 最初の記憶の平均年令男子四、四四才、女子三、八三才は、外国の諸研究結果よりは半年ほど遅くなっている。その原因は、精神発達の遅速というよりも、記憶経験に伴う感情調に関連するものようである。(c) 男女を比較して見ると、明らかに女子の記憶がより早く始まっており、その平均年令もより早い。このことは、女子の言語生活などの精神発達がより早いということと関連のあることと考えられる。

憶として残りやすいという、記憶の一般的法則と一致する。しかし、快と不快の経験の中、最初の記憶として残るものにはどちらの感情調の経験が多いかというと、諸研究によつて結果は同じではない。外国の研究ではどちらかといえば、快記憶が多いという結果になっているが、わが国では反対に不快経験の記憶が多いという結果が多い。そして外国では、快調経験はよく回想されるものが多いが、わが国では反対に不快経験の記憶が多いという結果になっているが、わが国では最初の記憶として快調経験が残ると説明されている。

わが国においても、快調経験が不快調経験よりも自然に回想される傾向が多いということは、確かに認められる。しかし、最初の記憶としては、不快調経験が多い。それは何故であろうか。その原因の究明は詳密に行なわなければならないが、何かわが国のおとなにおける幼児生活の取り扱いに間違つたものがあることが、一原因をなしていいるのではないかと考えられる。例えば、筆者の研究の中から氣づかれるものの中には、おとなが故意に幼児を驚かし、こわがらせて喜んだり、或いはちょっと氣をつけなければ分ることであるのに、気づかずして子どもを非常に恐れ、こわがらせたり、或いは不注意から怪我をさせたり、或いは子どもに理解されないひどい叱責体罰を加えたりすることなどが、子どもの最初の記憶として残っているものが非常に多い。これなどは明らかに不快調経験であり、おとの注意によって減少させることのできるものである。

(5) 最初の記憶として残るところの、中性的経験、快的経験、不

快的経験の年令を比較してみると、中性的経験が最も早く、快的経験がそれにつき、不快的経験の年令は快的経験よりも平均四、五月だけさらに遅くなっている。中性的経験と報告されるものの中には、快、不快の感情調を伴わない経験の外に、漠然とした不明瞭な経験が含まれている。したがつて、中性的経験が最も早い年令において残つてゐることは十分理解される。しかし、快経験の記憶が不快経験の記憶よりも早い年令において始まるということは、如何に説明すべきであろうか。

ここにおいてまた、前述の快的経験がよりよく回想され、不快なものが忘却されやすいという記憶の樂天性 (the optimism of memory) が考えられる。ウォールゲムート (Wohlgemuth, A.) は最近二週間内の快と不快の出来事のリストを作らせ、さらに数週間すぎてまた、その期の出来事について同様のリストを作らせ、その二回のリストを比較してみた。その結果、後のリストでは、前のリストの快の出来事の大半を含んでいたが、不快の出来事はそうではなく、忘れられているものが少くないことを見出した。この不快な経験の忘却がより著しいことが、おとなにも子どもにもあって、それが前述の不快調経験の最初の記憶の年令が遅い原因をなしていると考えられる。

三、幼児期の記憶と言語との関係

以上、成人した後に回想される幼児期の最初の記憶は、個人差が著しいが、全体としては予想よりは遅く、平均年令で三、四才であることを見てきた。

しかし、その当時の著しい学習能力より見れば、後年回想され得なくとも、或る種の著しい記憶がずっと早くから存在していると想定しなくてはならない。それは注意が喚起されず、意識されずして起る神経的保持で、象徴的過程を含んでいない、いわゆる生物学的記憶と呼ばれるものである。この種の記憶は、誕生後直ちに始まり、それによって行動が進展するのである。

人間では、さらに存在しない刺激の代理をする或る内的過程、すなわち象徴的過程と名づけられるものが著しく発達し、その代表形式としての言語が発達してくる。この言語の助けをかりると、一般に記憶学習がよく進展することが、いろいろ証明されているわけであるが、このことは、最初の記憶の場合にも当てはまるものである。このことによつて、言語が或る程度完成する三才頃から最初の記憶が残り始めていることが理解される。筆者の調査では確かに一才前の記憶であると思われるものがある。それは、物指しを手離さなかつたので祖父にひどく叱られた経験だと、家族のものから話しきかされているが、当人には、かかることばのやりとりの記憶は全くなく、ただぼんやりと二人ほどの人がいたことと、ガラス越しに白い雪が降つていたこと、すなわち、もの言わぬ光景だけがはつき

りと記憶されているというものである。これなどは、言語の未発達期における言語化の助けの少ない象徴的記憶の例である。

しかし、理解されない言語の学習の効果も皆無ではない。バート

(Burtt, H. E.)は、自分の子どもに、一五月から三六月の間ににおいて、いろいろなギリシャ文を読みきかせ、後年想起させて見た。

或る文は八・五才、また或る文は一四才でも記憶されていた。また困難度の等しいかつて学習した文と全く新しい文とを比較学習させて見ると、八・五才で二七%、一四才で八%だけ、かつて学習した文は時間が節約され、少ない努力で学習された。しかし、一八才では両者の間に差がなかった。これによつて見ると、理解ができるず、生活からも遊離しているギリシャ文の如きものの、幼児期における学習も初めはかなり効果があるが、その効果は年とともに弱まり、ついに零になつてしまふことが知られる。

以上の如く、幼児期の記憶は、その生活の諸領域に広く深く存在しているが、後年回想され得るものは象徴的過程としての言語生活の発達と関連して急速に増加してくる。しかし、これらの生活経験の中でも不快なもの、生活と遊離し日常使用されない経験は忘却の傾向が大である。かくて残る幼児経験においても個人差が著しい。知能や性格、生活環境などが関係しており、また精神分析学の主張の中にも傾聴すべきものがあるかと思われるが、それらは未だ十分明らかになっていない。